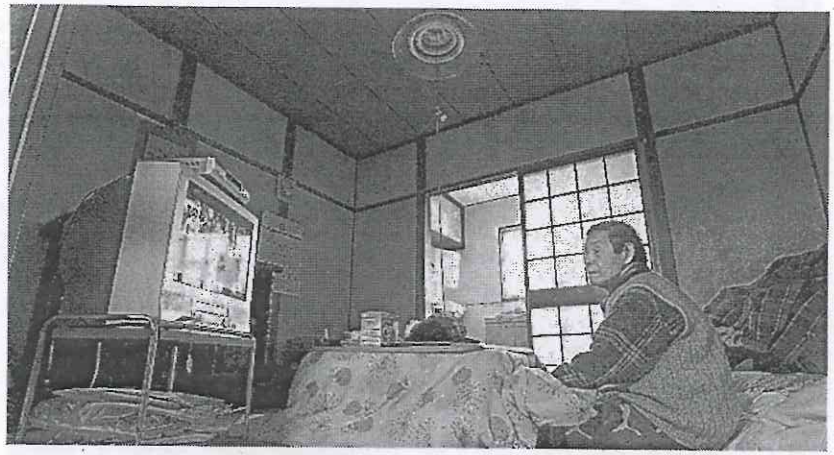
無年金 生活保護頼み

貧困となりあわせ

離婚・職転々…未納に思い及ばず



部屋でテレビを見る勇誠人さん。日中はほとんど居間の電気をつけず窓から差し込む日の明かりで生活する　＝24日午後、中里友紀撮影

今月24日の夕方、勇誠人さん(83)は兵庫県内の自宅アパートで、大相撲のテレビ中継を見ていた。6畳の部屋は日当たりが悪く、薄暗い。それでも光熱費が気にかかり、電気はつけない。

生活保護を受けて10年になる。この日の夕食は、100円ショップで買ったカット野菜の炒めものが主なおかず。月約11万7千円の保護費から家賃4万2千円が出て、残る約7万5千円が生活費だ。

41歳まで中国地方の町で事務の仕事をしていた。今の時代とは違って人間関係が濃密で、古風な土地柄だった。妻との不仲が知れ渡ったことをきっかけに勤務先にも居づらくなり、退職。離婚し、その後、北海道の炭坑や、建設会社の短期契約の作業員として各地を転々として働いた。

作業員の仕事は、狭く粗末な住み込みの寝床こそあったが、手取りは月に10万～15万円。「仕事がなければ、すぐクビになる。1日1日が勝負だった」。事務の仕事をしていたころは老後に備え、年金の保険料を13年間納めていたものの、転職後は頭が回らず、未納に。年金の受給に必要な期間（25年）を満たすことなく、時間がすぎた。

土木現場で働き続けていた73歳のとき、健康診断で深刻な高血圧とわかった。ドクターストップがかかり、突然、収入がなくなった。蓄えもなく、年金もない。病院から紹介された医療ソーシャルワーカーのアドバイスを受け、生活保護の利用をはじめた。

心臓の病気もあり、もう働けない。食費は月4万円弱、1日1300円を目安に過ごす。家に風呂はなく、2日に1度、400円の銭湯に行く。光熱費や電話代、日用品代もかかり、手持ちの衣類は下着以外、ほぼすべてがらい物という。

「年金がないのは自分任だと思っている」といさん。つらいのは、70歳の人に上乗せされた保護老齢加算（2003年度1万7930円）が06年でに段階的に廃止され、な人の葬儀や墓参りに行金の余裕もないことだ。

昨年秋に亡くなった、この葬式に行けず、香典めなかった。母と姉は中方の寺に眠るが、墓参はわない。代わりに近所のお堂で月命日の11日、27手を合わせる。

「本当に申し訳ない」さんは泣いていた。

受給4割 高齢者世帯

2011年度に生活保護を利用した約149万8千世帯のうち、最も多いのが約63万6千世帯（42・5％）の高齢者世帯だった。厚生労働省の統計によると、1992年度以降、全世帯に占める割合は40％を上回り続けている。

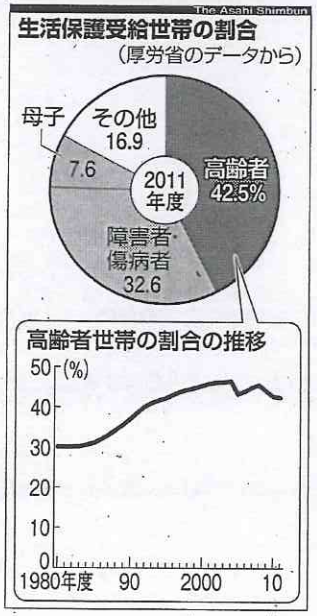
厚労省の資料によると、65歳以上の生活保護利用者（2006年7月時点）のうち、勇さんのように公的年金のない人は53・2％。残る46・8％は何らかの公的年金をもらっていた。年金をもらいながら生活保護を受けると、その金額分を差し引いたお金が保護費として支給される。

20歳～59歳の全国民が加入する国民年金（基礎年金）は、40年間保険料をおさめても月6万5千円あまり（12年度）。年金があっても老後の十分な支えにならない現実がある。一方で、「基礎年金と比較し、保護費が高い」という批判もつきまとう。

ただ、「基礎年金は現役時代の蓄えと合わせて、老後の生活費の一部を補う制度」（厚労省年金局総務課）低限の暮らしを保障する保護とは異なり、すべてかなう仕組みではない。

さらに、生活保護を使は、預貯金の取り崩しや売却をしても、月の収入の示す最低生活費（都市単身者は家賃を含め12万万円程度）に届かないこ条件。同省によると、生護を受けた後は資産を築とに制限があり、例えば車の購入は認められな

高齢者が生活保護に行く構図は、今の高齢者だ話ではない。慶応大学の康平教授（社会保障論）は正規労働が拡大し年金保が未納の若者は多い。現代の不安定さが老後の不さに結びつくのは社会のみでもある。低所得者に所を再分配する仕組みを考すべきだ」と話す。（久永隆

◇

60人に1人が生活保護代。貧困が広がる背景にはがあるのでしょうか。この画は随時掲載しています。